

安史の乱 (755～763年にかけて河北の軍閥安禄山とその部下の史思明のおこした叛乱である)

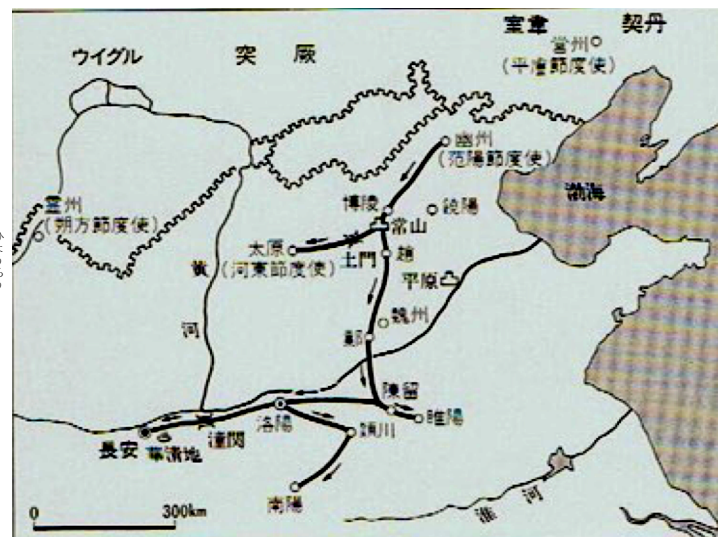
「君側の奸、楊国忠を討つ」を大義名分に755年11月9日、安禄山は15万の大軍を率いて范陽から出撃、南下して洛陽、長安を目指した。一日40キロの速さで南下し、12月1日には黄河の北岸に達した。12月13日洛陽が陥落し、反乱軍の力に圧倒された河北24郡のほとんどが戦わずして降った。それを聞いた玄宗皇帝はうろたえて「河北24郡には、一人も義士はおらぬのか」と嘆いた。そこへ顔真卿から伝令が届いた。「孤軍奮闘ながら、勤皇の志士を募り王朝の安寧に死力を尽くす覚悟」と。玄宗は「朕は顔真卿の顔も覚えていない。それなのに、顔真卿はこんなにも忠義を尽くしてくれるのか」と涙を流した。顔真卿の従兄弟の顔杲卿が太守であった常山は反乱軍の進路にあった。杲卿は禄山に降ったふりをして顔真卿とひそかに連絡をとり、反撃の機会をまつた。真卿との連絡には末子の季明があつた。顔杲卿は奇策により安禄山に奪われた土門（娘子関）を12月22日に奪還した。土門は太行山脈を東西に横切る唯一の山道である。土門が奪回されたことで賊に降っていた郡のうち18郡が唐に帰属した。この報告のため杲卿は長男の杲明を長安に遣わした。杲明は途中で太原の太守の王承業のもとに立ちより、卑劣なこの男に皇帝への文書をだましとられて署名を書きかえられ、土門解放の功績を横取りされてしまった。



土門



常山城の城壁跡



安禄山の進軍経路

安禄山の片腕の史思明が北から、南から蔡希徳が常山城に攻めてきた。いくら催促をしても太原の王承業は援軍を送らなかった。手柄を横取りしたことがばれることを恐れたかららしい。顔季明は賊に捕まり川に沈められて殺された。



玄宗幸蜀図 部分

都は陥落した。玄宗71歳、在位45年である。6月14日馬嵬駅という宿場で近衛軍の兵士により楊国忠は殺された。

杲卿はなおも戦ったが兵糧が尽き常山城は陥落し1万余の兵は殺され、杲卿は洛陽に連行された。安禄山の前にひきすえられた杲卿は安禄山を罵倒した。怒り狂った安禄山は、杲卿の舌を抜き、手足を切断し、その遺体を洛河の橋げたに縛りつけて晒しものにした。杲卿は手足を切断されても顔色ひとつ変えずに、安禄山を罵りつづけた。そのあと、30人を超える顔一族が処刑された。

756年元旦安禄山は洛陽で大燕聖武皇帝と称し皇帝になり、新政府を樹立した。6月8日潼関が占領される。6月13日玄宗四川に逃亡し、安禄山軍が長安に入城し

つづいて楊貴妃も殺された。38歳であった。

7月12日 肅宗、靈武で即位し玄宗は上皇になる。10月顔真卿は平原城を放棄し南走。河北諸郡は史思明の手に帰した。757年1月5日安祿山は次男の安慶緒に洛陽で殺された。55歳であった。安慶緒皇帝を称す。10月に肅宗は長安を回復した。史思明ら降伏。758年史思明再び謀叛する。759年3月史思明、安慶緒を殺し、洛陽で大燕皇帝を称した。761年史思明、長男の史朝義に殺される。史朝義、大燕皇帝に即位。762年唐軍洛陽を奪還。4月玄宗死去78歳であった。13日後52歳で肅宗死去。代宗即位。高力士死去。李白死去。763年正月史朝義、部下の李懷仙に自殺させられる。ここに安史の乱は終わった。この乱の死者は360万人に達したと言われ、それは人口の三分の二にあたる。

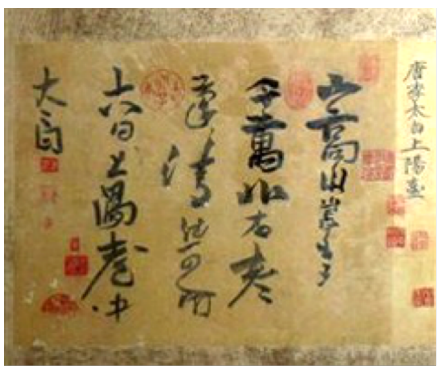
王維と杜甫は逃げ遅れて、安祿山軍に捕まり長安に幽閉された。そのとき杜甫は「春望」を作った(757年の春)。「国破れて山河あり 城春にして草木深し・・・」



女官俑



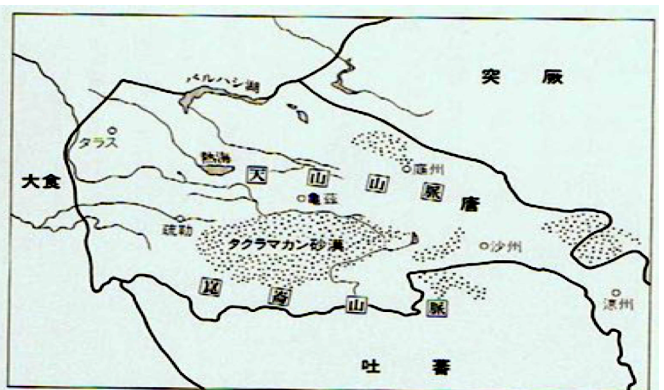
虢国夫人遊春図



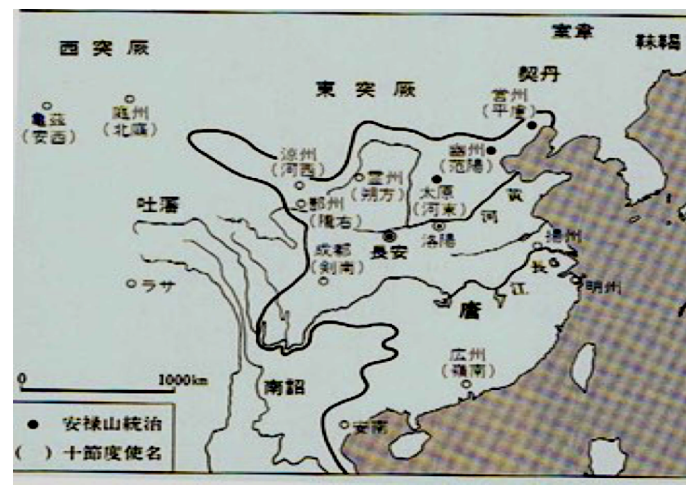
李白の真筆



平原城の城壁



西域 「タラス川の戦い」 751年



十節度使 「瀘水の戦い」 751年

祭姪文稿（乾元元年9月・758）

顏真卿49歳の行草書

「祭季明文」「祭伯稿」とも。

山西省蒲州の普救寺で書かれた。

真跡である。「姪」は「めい」ではなく甥のこと。約6m×約29cmの卷子仕立てで多くの題跋・観記があり50近い収蔵印が押されている。本文は麻紙に約29×77cm 全23行269字 台北故宫博物院蔵。安史の乱で従兄の顔果卿と果卿の末子の季明は惨殺された。その顔季明に捧げた弔辞の草稿。「天下第二の行書である」（蘇軾）「文章、字法、みなよく人の心を動かす」（黄庭堅）「人と書が一体となった表現」などと評される。

悲しみや憤りが書の線にこめられている。書は正座して心閑に書くものであるという固定観念はどこから来たのか。顔真卿は、感情の起伏や耐え難い苦しみをことばにしつつ、ことばにできない悲憤を書線にこめることで、激しくやりばのない苦悩を乗り越えたのではないだろうか。王羲之が切り拓いた藝術としての書の伝統を顔真卿は正しく継承し、書は人間のあらゆる精神活動を表現できる最高の藝術であること示唆した。



維れ乾元元年歳次戊戌、九月庚

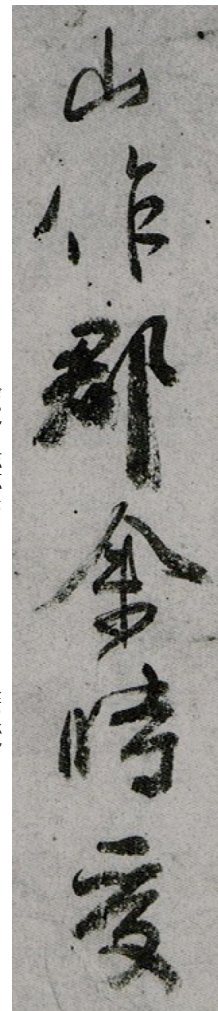
午朔三日壬申、第十三叔・銀青光祿（大夫）



側筆の部分と藏鋒（中鋒）の部分



(常) 山郡に太守となり私もその時に(命)を受けて、



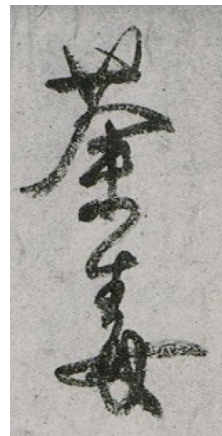
文字の大小、
点画の太細、
運筆の緩急、
抑揚の変化と
調和。

土門を開く。土門既に開き、※土門は井陘口ともいう。現在の娘子関。



門構え、土の変化。
単純な卒意の書と
は思えない。

王羲之「喪乱帖」より荼毒と毒



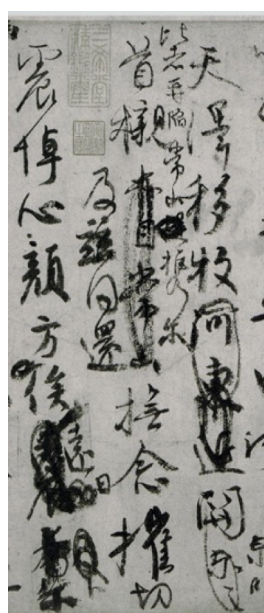
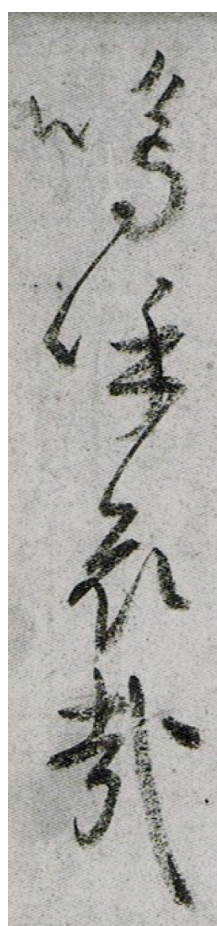
荼毒



父陷り子死、

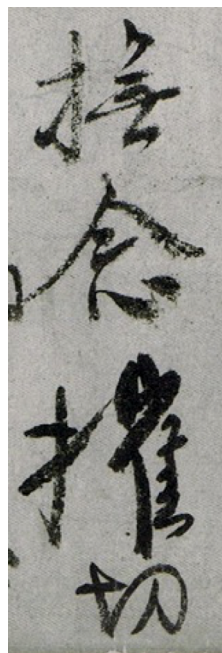


嗚呼 哀しい哉

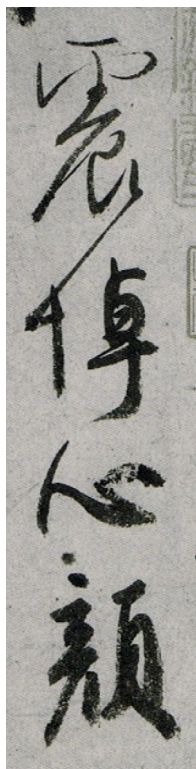


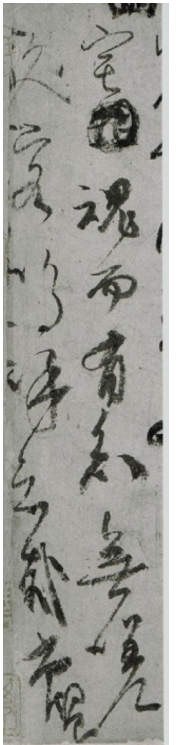
私は天の恩恵をうけ、河関に移って民を治めることになった。泉明が最近再び常山に行き、汝の首を納めた棺を携え、ここにもとに帰還した。哀れに思う気持ちで胸がはりさけ腸がちぎれ、死をい
たんで心と顔をふるわせるのである。ここに遠日
をまつて、爾が(幽宅を)トせんとす。(汝が安
らかに眠る家を占い定めようとしている)

撫念推切、(悲しみのあまり胸がつぶれ腸が断ち切れること)

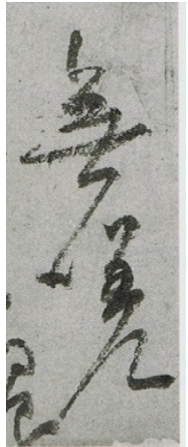


心顔を震悼す。(死をいたんで心と顔をふるわせて悲しむこと)





魂たましいにして知る有らば、久しく客た
るを嗟なげく無かれ。嗚呼ああ 哀かなしいかな。
尚こいねがわくは饗うけよ。



嗟なげく無なかれ。



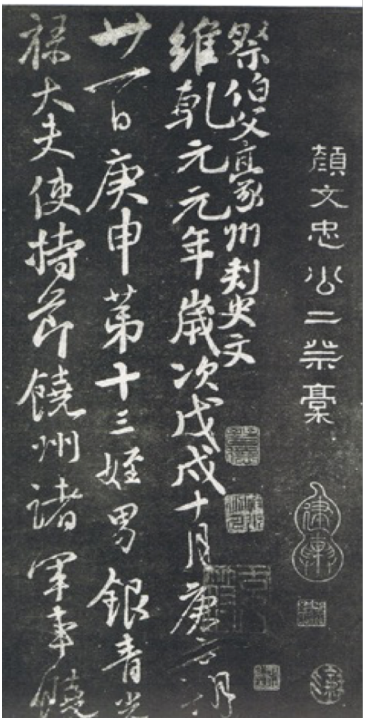
嗚呼ああ 哀かなしい哉

祭伯文稿

（乾元元年 10 月・758）真卿 49 歳の行草書 「祭伯文稿」「告伯父元孫文稿」ともいう。全文 401 字。

真跡を米芾がみているが、現在には刻帖しかない。伯父おじ顔元孫の霊を祭ったときの報告文の草稿である。

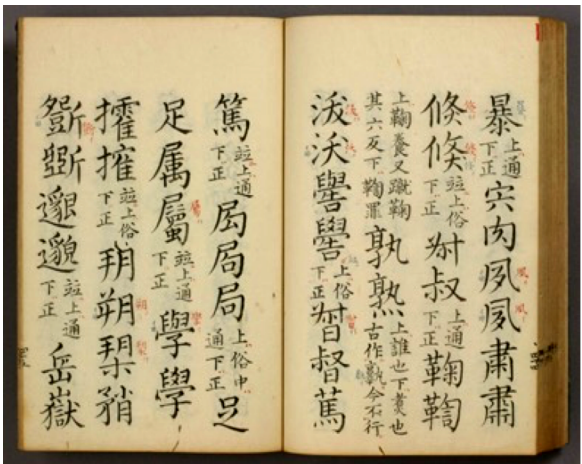
758 年 3 月真卿は蒲州（山西省）刺史ししとなったが、10 月に饒州（江西省）刺史に転任させられた。その赴任の途中、洛陽にある元孫の墓前に乱で殉難した一族の者たちが朝廷より表彰されたことを報告した。



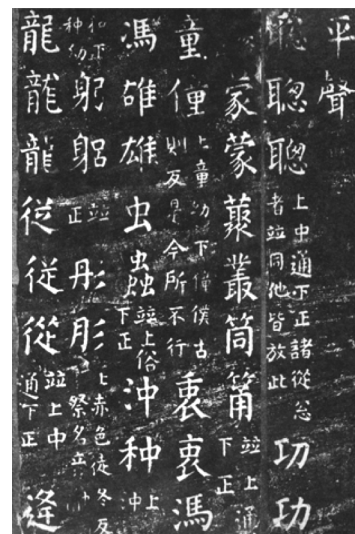
顔元孫は顔杲卿の父であり、顔真卿の育ての親である。当時顔真卿は一族の中心人物であつた。真卿の命により杲卿の長男の顔泉明は乱で難にあつた杲卿の一族を身代金を払い蒲州に連れ帰った。その人数は 300 余人で、真卿はその人らを養い、身の振り方をつけてやつたと伝えられている。この時、泉明は常山から弟顔季明がんきめいの首を持ち帰り、長安の杲卿の墓に合葬した。

『千禄字書』

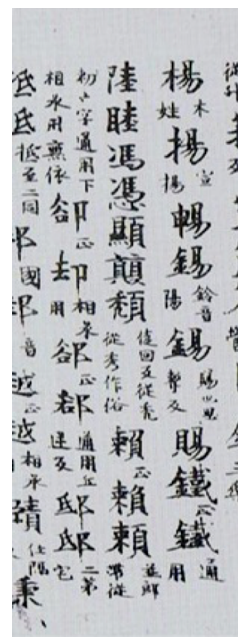
顔元孫の箸書。楷書の字体を整理し標準字形をしめした字書。貞観（710〜720）のころの著か？



千祿字書 (大歴9年・774) 顔真卿 66歳の作品 小楷 両面刻。原碑は失われた。模刻されたものか。



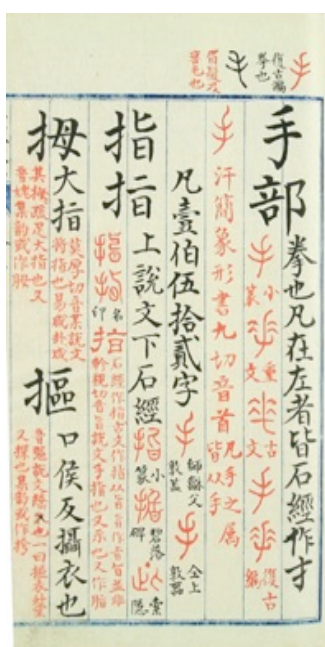
『顔氏字樣』残卷 敦煌発見 (633年頃?)



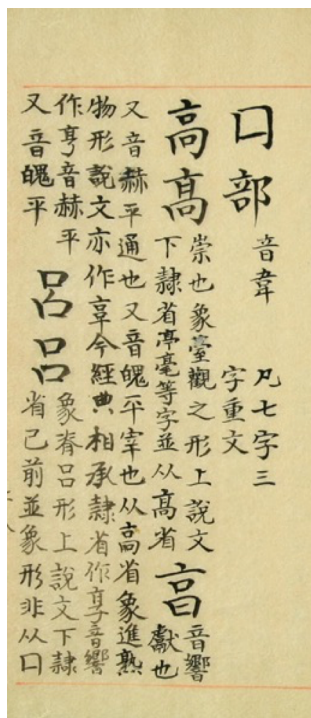
等慈寺碑 (顔師古・637〜641年)

字典体の系統の文字はほとんどかかれていない。初唐の楷書の中から正字を選ぼうとしていたからだと考えられる。この楷書は、初唐の完成以前の、やや偏平な字形である。

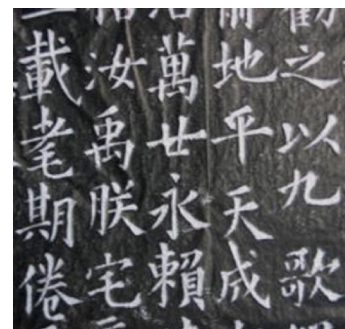
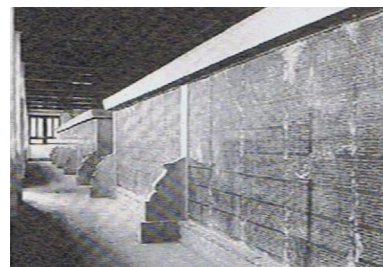
『五經文字』(大歴11年・776)



『九經字樣』(太和7年・833)



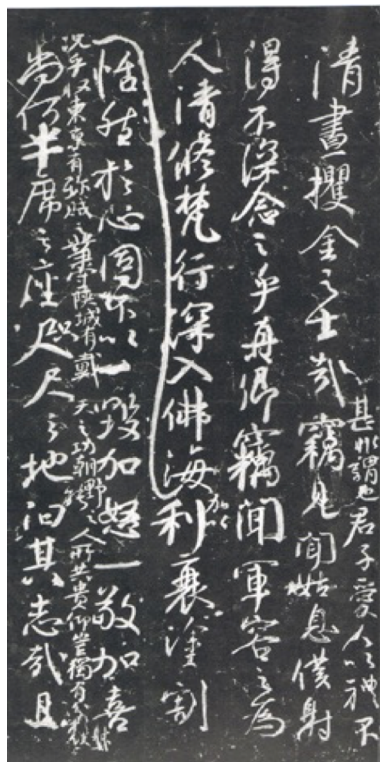
開成石經（開成2年・837）
楷書 「唐石經」ともいう。



儒教の經典を7年がかりで刻した。13種の經典が114枚の石の両面に刻されている。総字数65万字あり。各石は高さ約217幅97cm。西安碑林蔵。熹平石經、正始石經につづく第3番目の石經で、『五經文字』『九經字樣』などを基礎に作られた。長安の太学にて建てられ、科挙での標準テキストに定められたので大学生や文士たちが学んだ。その字体は、これからの後の中国の学問や教育で使われる漢字の基準となった。開成石經の正字の基準は嚴格であり、これが一般に普及していった。

「平成」の語源の「地平天成」(『尚書』卷第二虞書大禹謨)が第10石2段目第16行に見える。

争坐位文稿（広徳2年11月・764）
顏真卿55歳の行草書



真蹟を米芾、蘇軾、黄庭堅らが見たと思われるが、刻帖しか現存しない。刻本は数種あるが、西安碑林にある「関中本」(西安本)が有名である。米芾、蘇軾、黄庭堅はこれを行書の手本として習っている。

「平淡天真」を書の理想とした米芾は、作爲的として顏真卿の楷書を嫌ったが、この行書は激賞した。「篆籀」の氣有り、顔書の第一と爲す。字は相い連属し、詭異飛動して、意外を得たり」

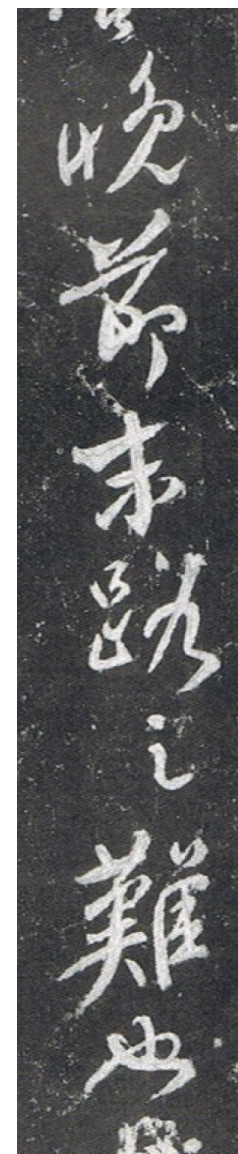
※「篆籀の氣」・篆書の用筆。 ※「詭異飛動して」・不思議なほどに飛動して連なり。 ※「意外」・人意を超えた筆意。蘇軾は「公の他の書に比し、尤も奇特なり。手にまかせて自然、つねに姿態有り」「古法を一變すること、杜子美の詩の如し」と述べている。

※「奇特」・すぐれていること(さま)。 ※「姿態」・形に趣があるさま。 ※「杜子美」・杜甫のこと。子美は字。ふところが広く、ふつくらとした中鋒藏鋒の線質や字形、自在に変化する字形、力強い線にこめられた感情の流れ、筆の弾力を駆使した書きぶり、空画の大きな動き、章法の工夫(大小、細太、強弱の変化、余白など)など学ぶことは限らない。

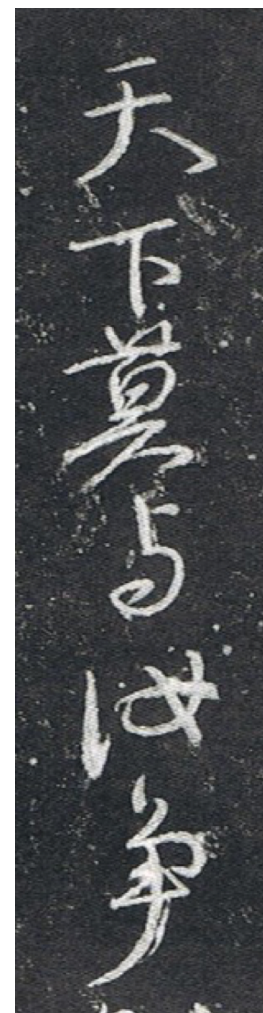


者。半九十里。言

晚節末路之難也



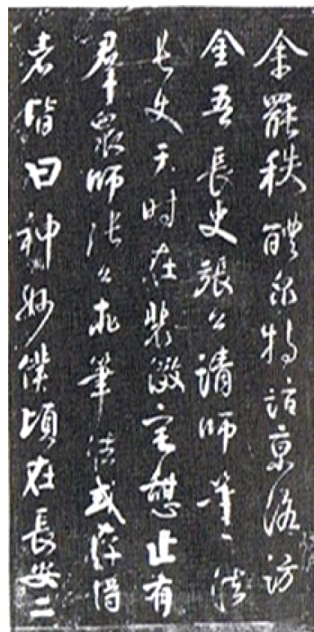
天下莫與汝爭



尚何半席之座



張旭十二意筆法記 (天宝5載・746) 伝・顔真卿 38歳の行書 撰文も顔真卿

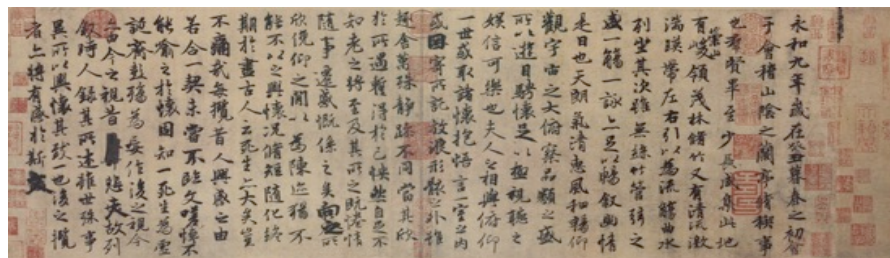




※「灌頂曆名」は弘仁3・4年（812年・813年）に空海が高雄の神護寺で灌頂を受けたときの受法者の名簿である。日本初の灌頂とされる。顔真卿の書風の影響が見られる卒意の書。空海が入唐した年（804）は顔真卿没後20年目であった。



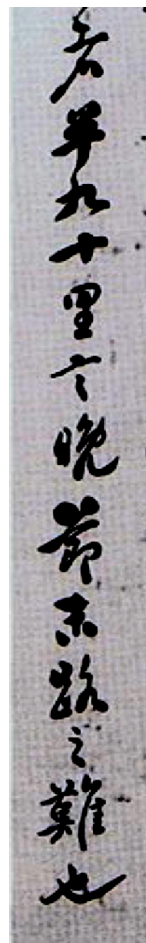
空海・灌頂曆名



王羲之・蘭亭序 (八柱第三本・神龍半印本) 353年

臨書例

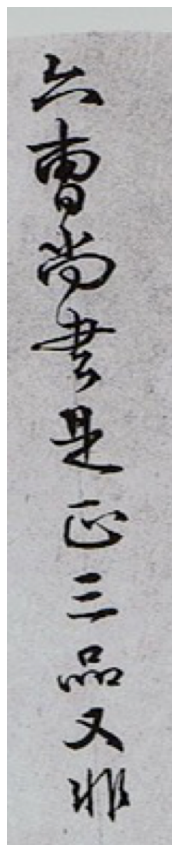
顔真卿の「祭姪文稿」「祭伯文稿」「争坐位文稿」は「三稿」とよばれ、多くの人びとに臨書されつづけている。残念ながら現存している真蹟は「祭姪文稿」のみである。刻帖では真はつかめないであろう。



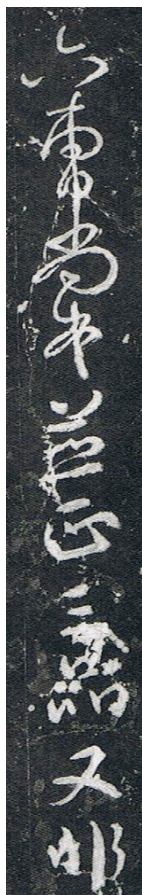
争坐位文稿
呉讓之



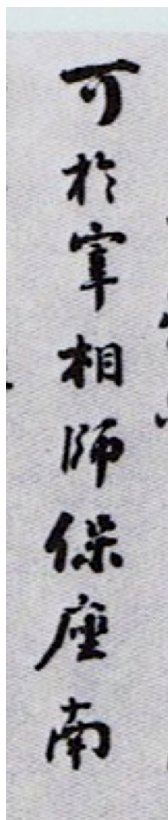
争坐位文稿



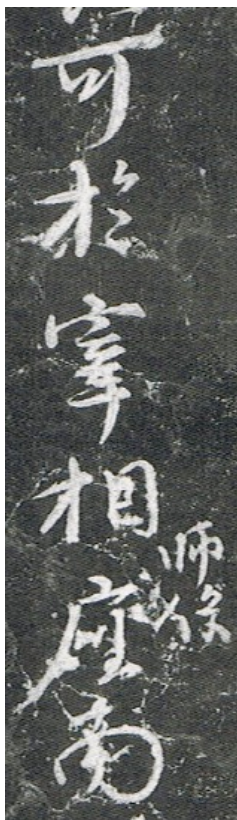
争坐位文稿
伊秉綬



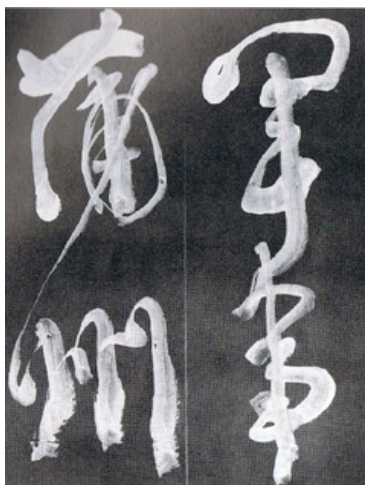
争坐位文稿



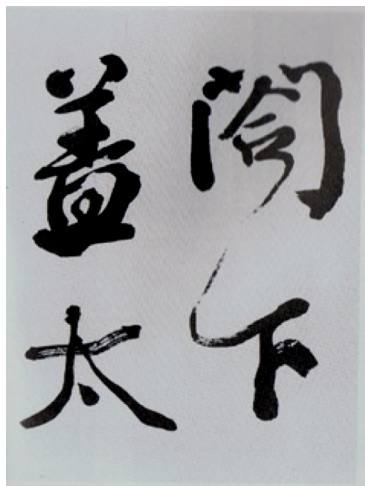
争坐位文稿
劉墉



争坐位文稿



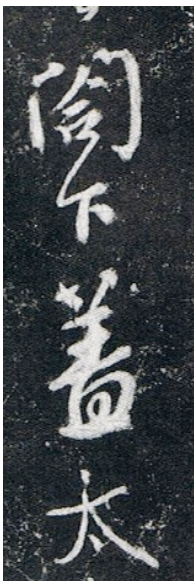
争坐位文稿
上田桑鳩



争坐位文稿
手島右卿
こうけだしたい
閣下蓋太



争坐位文稿
祭姪文稿



争坐位文稿